

No. 1335

道路をきれいに

— 茨 城 ・ 水 戸 —

私たちの日常生活をささえる道路。8月はこの大切な道路を守る月間です。茨城県水戸市。8月11日、この町で建設省と駅前商店街合同の道路環境整備作戦が行われました今回の作戦は歩道にはんらんしている違法の看板撤去とグリーン帯にすてられているアキ缶やゴミを一掃するのが目的。道路パトロールカーによる広報活動。まず建設省による車道の清掃、街路灯の点検横断歩道橋の整備が約1kmにわたって行われました。つづいて建設省の係員と商店街の人たち約50人による道路整備。不法に取り付けられた看板が次々に手際よく撤去されていきます。心ない人たちに捨てられたアキ缶やゴミ。グリーン帯の中は外から見えないだけに汚れも激しい。この日集められた看板とゴミはトラックにざっと一杯。道路は正しいマナーで広く、きれいに使いたいものです。

幻 の 村

8月5日、旧盆を前に群馬県東部の奥深い山中で、40年前、廃村となった部落の法要が行われた。法要にはかって村に住んでいた人やその家族50人余が参列した。昭和47年閉山するまで公害問題をはじめとする数々の波もんを投げかけた栃木県足尾銅山。廃村となった村は群馬県利根郡利根村といい、皇海山を中心に砥沢、平滝のふたつの部落からなっていた。村の人々は明治末期から40年間足尾銅山で使われる用材を切り出す仕事に従事していた。しかし昭和16年用材の使用が中止され人々は職を失い全員が山を下りた。栃木県足尾市、山をおりた人々の約40%がこの町に住みついた。近藤初寿さん73才、この人も青春時代を山で過ごしたひとりである近藤さんのもとには村を想う気持をたくした手紙や葉書が後をたたない。近藤さんは自らの職業を生かして、村の機関紙“皇海”を編集発行。年に一度発行する“皇海”もこととして11号を数えた。崖を上がり、谷をわたり、今は訪れる人もない山道の人々は無人の境に向かう。利根村の人々は毎年この地にやってくる、今年は50余人が参加したなつかしい顔がある。息子や孫といっしょの年老いた姿もあった村は崩れた石垣と朽ち果てた古材だけがかってここに人間が生活したことを物語るのみとなっていた40年の歳月は村をもとの林にもどそうとしていた。村の跡地を歩く人々。さまざまな思い出が彼等の脳裏をかけめぐる。酒をくみかわし歌い、踊り続けた。それが幾重にも重なり人々のふるさとを思う心がひとつになった時幻の村は甦った